

平成29年7月11日

浜田市議会議長 西田清久様

議員名 江角敏和



調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため研修等を行ったので、その結果を報告します。

記

1. 期 間 平成29年6月5日(月)～6月7日(水)

2. 視察先と内容

①網走市 東京農業大学オホーツクキャンパス(網走市)

『オホーツクものづくり・ビジネス地域創成塾の取組について』

(説明) 副学長 食品香粧学科

渡部 俊弘 教授

生物産業学部 地域産業経営学科

菅原 優 準教授

②網走市郷土博物館 (説明) 米村衛 館長

③網走市モヨロ貝塚館 (説明) 米村衛 館長

④網走市オホーツク流氷館 (説明) 水島 流氷館ガイド

⑤網走刑務所『刑務所と地域の関係・役割』

(説明) 案内: 麓 学 網走刑務所長

⑥博物館 網走監獄 (見学)

⑦北海道立北方民族博物館 (説明) 館内ガイド

3. 参加者 牛尾 昭、 芦谷英夫、 小川稔宏、 岡野克俊
上野 茂、 岡本正友、 野藤 薫、 江角敏和

4. 調査経費 72,641円 (詳細は別紙)

5. 調査研究活動の概要と所感 (別紙)



○ 調査研究活動の概要と所感

①東京農業大学オホーツクキャンパス

『オホーツクものづくり・ビジネス地域創成塾の取組について』

浜田市出身の三浦肆玖楼が5代目の学長であったことや、大学と地域による地方創生への具体的な取組を学ぶため、同大学を訪問した。

まず、渡部俊弘副学長から、東京農業大学の歴史について、昨年開催された「創立125周年記念シンポジウム」の新聞（右写真）



へ掲載されている創設者、「榎本武揚」氏の実業精神なども含め概要説明を受けた。

続いて、菅原優准教授から、「オホーツクものづくり・ビジネス地域創成塾の取組について」、黒瀧秀久生物産業学部長が以前、「どうする！？人口減少時代のオホーツクの地方創生 ～ 今こそ住民自治の力量が問われるとき」と題し、講演された資料に沿ってお話された。

ここで私が注目したのは、「地方創生に向けて必要なこと」として、◆地域の豊かな自然環境と生物資源を維持しつつ、持続的に発展させることは、地域産業の危機（グローバル化と価格低迷、経営悪化、環境劣化、TPPなど）を迎えている今日の状況では困難。また、◆現在の地方創生政策も一時的な政策で終わってしまう可能性が高い！」と捉えられていること。そして「本当の地方創生のあり方を、地域が主体となって考えていく必要がある。として、その一つの方法を、1次産業を主幹産業とする地方では、地方創生のビジョンに「農商工連携・6次産業化」が欠かせない。と位置



づけ、分析と実践的研究が継続して行われていることであった。

そのために、大学の地域貢献と地域活性化、リーダーの人材育成を目的として、2010年から『オホーツクものづくり・ビジネス地域創成塾』が創設された。塾生は、産官学連携で地域の社会人受講生を受入れ、当初は文科省の補助事業「地域再生人材創出形成拠点のプログラム」として採択を受け、

現在までの7年間で、延べ121名を数えられている。

そこでは、北海道・オホーツク地域において、特に農業は、原料供給の役割が大きく、低次加工に留まり、競争力が低かった産業を育成するため、地場産品を利用した食品開発の知識や技術力を身につけ、高品質な地域ブランドづくりから、産業振興や地域再生を実現できる、地域のリーダー人材、現



在の「榎本武揚」の養成を目指されてきた。また、地域資源を利用した高付加価値型の新商品開発や起業化・事業化を促進し、同業種連携、異業種連携の強化、新産業創出、雇用の拡大に繋げることを目指し、これまでに12の新規事業と46商品の開発が成されている。

業種別では、1次産業に36名の就業、14商品の開発、2次産業に18名の就業、17商品の開発、3次産業は58名で15商品、5事業という成果をおさめられている。具体的な事例としては、北海道産の生めんの冷や麦や、土日限定のスイートポテト、海産物と農産物のコラボレーションによるシーフードグラタンの開発等である。

このような商品や人材づくりは、本業の大規模農業があるなか、簡単なことではないが、紹介されたような成果を生み出されていることに、県立大学が存立する浜田市としても目的を明確にしながら、さらなる連携強化の必要性を感じた。

②網走市郷土博物館



浜田市では、歴史資料館整備が議論となっているなか、人口3万6千人余りの網走市に、博物館など5施設（県関係含む）も有しておられることへ着目し、視察することにした。

郷土博物館内において、網走市議会の山田庫司議長から歓迎

迎の挨拶があり、続いて郷土博物館の米村衛館長さんより博物館についての説明を受けた。

● 昭和11年に北海道で初の博物館。● 地域の歴史と自然を知ってもらうために建設。

● 1階は自然動物標本等を展示。● 2階に





は、歴史資料等が展示されていた。

2階の展示については、浜田の各資料館同様の位置付けだったが、1階は写真のように動物や鳥・魚類等々の標本が展示されていて、浜田の資料館では見ることのできないものであった。浜田市なら「できるのか?」と、考えさせられた。

また、入館者数は、後に報告する⑦北海道立北方民族博物館が開館されるまでは、年間5万人の来館者があったものの、

開館後は5千人位で推移しているようだ。激減したとは云え、浜田市6カ所の資料館入館者の合計数より、多いことについても考えさせられた。

● 本館の運営費は、約800万円。● 特別展は45万円の予算。● 館長と受付含め4名で運営。分館として、次に記載しているモヨロ貝塚館がある。

③網走市モヨロ貝塚館（郷土博物館分館）

館名となっている、モヨロ貝塚を発見した米村喜男衛氏は、説明していただいた米村衛館長（郷土博物館）の祖父であり、右写真のように、司馬遼太郎の『街道をゆく』で、「日本のシュリーマン」と呼ばれている方である。

この、モヨロ貝塚館は、平成25年5月に新しく、郷土博物館分館として開館されたようだが、貝塚遺跡の上部へ建設する構想だったことから、文化庁から多くの規制がかかり、建設計画から完成までに12年もかかったそうである。その規制を生かした施設建設や、展示にも工夫が凝らされていた。

文化庁からの予算措置は、建設費のみで、展示等に関する措置がなく、貝塚地層展示などについては、職員手作りで作成したそうである。それを聞き、浜田



市の旭歴史民俗資料館に展示してある立体地図も「職員の手作りだった」と、総務文教委員会の視察時に伺ったことを思い出した。このモヨロ貝塚館は、名称の如く、モヨロ貝塚に纏わる展示に特化した館であったが、浜田市においても、このほど民間主体で「石見畳ヶ浦資料館」が設置された。今後の訪問・利用状況や、展示内容を精査しながら、市としての支援のあり方も検討する必要があると感じた。

④網走市オホーツク流水館

昭和55年に、天都山展望台の1階へ、世界初の初代ミニ流水館が設置され、昭和60年の新女満別空港オープンに併せ、通年観光を目指し、平成27年に建設費15億円をかけて、同じ場所へ新館を建設・開館された。流水とオホーツク海をテーマにした網走市の科学館の位置付けのようだが、公社を設立し、現在は指定管理により運営が行われている。



北緯44度に位置する網走市で、流水が海を覆い尽くすのは、アムール川、オホーツク海による自然環境が成し得る技である。即ち流水は、極東ロシアのアムール川からの表層水が、オホーツク海で北からの季節風により冷やされ、蓮状の氷となって南下、成長し、盛り上がりながら、北海道沿岸に押し寄せる。そのことにより、この海峡はプランクトンが多く、豊かな海となっている。と、右下写真のようにパネルや展示品を利用しながら説明された。

また、オホーツク固有の魚類、クリオネ、なめだんご、の展示や、その自然の営みを映像と音響で視聴でき、そして流水展示室では、実際にマイナス20度の世界も体感できた。モヨロ貝塚館の開館が、平成25年、このオホーツク流水館が、平成27年の開館で、連続した開館・建て替えであり、通年の流水観光を意識した建設であると感じた。



それは、網走市の一般会計が、約239億円、浜田市は389億円で、「豊かなオホーツクに活みなぎるまち」とする、網走市の「将来像」からも、観光に力点が置かれていることがうかがえた。この施設からは、しまね海洋館アクアスを想起した。施設の性質・役割分担を県市が意識していきたいものである。

視察した他施設の開館時期を視ても、やはり同時期が多く、新空港のジェット化に併せた、観光振興目的が起因していると感じた。施設開設時期は、こうした「契機」、ということも一考すべき条件のように思えた。

⑤網走刑務所

『刑務所と地域の関係・役割について』

網走刑務所では、麓学所長、廣田肇総務部長、山端忠晴処遇部長さん達の出席のもと、「刑務所と地域の関係・役割について」、説明と質問・回答及び意見交換、さらには、施設内の見学もさせていただいた。

この施設を視察する目的として、浜田市には「島根あさひ社会復帰促進センター」があり、その名称のごとく、社会復帰へ向け、市や地域として、どのような取組や事業が展開できるのか、という問題意識からであった。特に、地元新聞へ「受刑者が最高級和牛づくり」（網走刑務所）の記事があったことから、出所後、そうした仕事に就いているのか、という



ことへも興味があった。しかし、網走受刑者の約80%が関東近県からの入所、そして北海道内が13%、刑務作業は農場の作業が多く、累犯は平均で4回くらい…と、比較的、刑が軽く初犯が多い、島根あさひ社会復帰促進センターとは、少し環境が違っていた。

質問では、「更正に向けた地域との連携や繋がり」、「刑務所内での教育プログラムと社会復帰の関係」、「出所して仕事や住居等がないと再犯につながりやすいのでは」、「和牛飼育などで出所後、農業就業や起業へと進む人がいるか」等々、議員側から質問したが、総じて期待した内容の回答ではなかった。しかし、これは、前記したように、施設の性質や環境の違いが背景にあると思った。



他力本願でなく、国内で2例目のPFI方式による、島根あさひ社会復帰促進センター設置を引き寄せた浜田の地から、実例を積み重ね、全国の模範となる取組を確立していくべきだと感じた。なお、網走刑務所は、上記の写真にあるよう、古い施設も残されていたり、受刑者の作成品も販売されており、麓学所長も話されていたが、同刑務所や博物館網走監獄が、網走市の観光振興へ寄与していることも実感できた。

島根あさひ社会復帰促進センターも視察者が多いと聞く。社会復帰の環境づくりや、人権意識の啓発を一層重視した取組が重要であることを再認識した。

⑥博物館 網走監獄

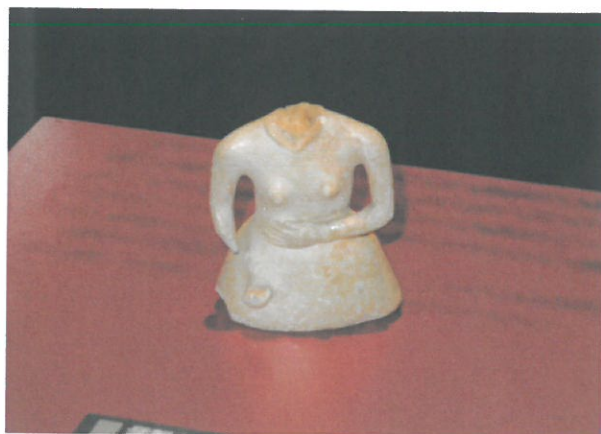
網走刑務所の所長からも勧められた、「博物館 網走監獄」を見学した。昭和58年財団により開館され、設立経緯は、視察した⑤網走刑務所の全面改築が昭和48年に始まり、明治時代に建造された建物を文化財として移築復元すべき、との声が広がったことから財団を設立し、当初9億円の移築復元費に苦労されたようだ。2016年に8棟が国の重要文化財、6棟が有形文化財に登録されたそうである。「道路の開拓から始まった北海道開拓。それは網走監獄の始まりでもあった」とされる、その歴史は、道路建設で昼夜の突貫工事を行い、収容者と看守に多くの犠牲者をだした。そうした苛酷で厳しい歴史があったことを紹介する、広大な野外歴史博物館であり、重要な観光施設となっていた。

この施設見学から感じたことは、浜田市において、歴史に学び、未来に希望が持て、現在を生き抜く力を得られるような、歴史資料館となしてほしい。

⑦北海道立北方民族博物館

この施設は、北海道教育委員会が設置し、財団法人北方文化振興協会が、指定管理者として管理されている。特徴は、日本で唯一、世界北方地域の諸民族文化（北方文化）の調査研究を専門分野とする施設であった。従って、国内だけでなく、世界の北方地域の様々な民俗文化が紹介されていて、質・量的にもスケールの深さ・広さに感心した。

浜田市も県内唯一の国際貿易港：浜田港がある。その歴史も踏まえ、世界に視野を広げられる施設や展示があってよいと思う。世界こども美術館などの活用も推進したいものだ。世界へ目を向けた、歴史的人物、会津（今津）屋八右衛門や、能海寛などなど、もっともっと紹介し活かすべきではないか。今回の視察で学んだ内容や感性を、浜田市での資料館等の活用・整備に関する一般質問等へ活かしていきたい。



以上